

居住地における水環境整備に関する研究
～奈良県のため池を事例として～
奈良女大生活環境 ○藤居由香 西村一朗

目的 より快適に生活していくための、居住地における環境構成要素の一つに水が挙げられる。様々な水環境の中で、奈良県では「ため池」が重要で、その総数は約12,000個と全国第4位である。かつて主に農業用水として利用されていた奈良県の「ため池」は、吉野川分水の完成により、近年農業用灌漑施設としての役割は縮小傾向にあり、新たな利活用を考える時期にきている。本研究では、「ため池」の整備について調査を行い、今後の水環境整備と「ため池」のあり方について検討する。

方法 「ため池」周辺の整備による公園化を取り挙げ、居住地に「ため池公園」が数多くある奈良県大和高田市で、利用実態、意識について留置式アンケート調査を中学生以上の居住者に対し行った。調査地区は4箇所の「ため池公園」に囲まれる位置にある。有効回収票は404票で、解析にあたり単純集計、クロス集計を行った。

結果 調査により、居住者は、「ため池」が水や緑の自然景観要素としても非常に重要なので、埋め立てるよりも「池」を残す方向で今後整備する事が望んでいる。しかし、親水性よりは安全性の方を重視していることがわかった。また、「ため池公園」の現状に不満の声も多く、今後についての意見としては、池の水の浄化、池周辺の美化や、草花、樹木、遊具、砂場、照明、遊歩道、駐車場等の設置、自然環境を残すこと、子どもが安全に遊べる環境、利用者のモラル向上が必要、というものなどがあつた。水環境の地域住民による利用を促進し、居住環境をより快適なものにするためには、行政の一方通行ではなく、住民の意見の反映された整備が不可欠との声も多い。